

Column

川が川をつくる 多自然型川づくり

平成9年の河川法の改正で「多様な生物が生息できる空間の整備」が「美しい自然景観の保全」と同様求められるようになりました。そこで取り組まれたのが「多自然型川づくり」です。これは、自然の川本来の状態に近い形で河川改修を行うもので、洪水などに十分耐えられることを前提に、植物や動物にやさしい環境を作ったり、自然の風景に馴染んだ川づくりを目指して進められています。平成9年2月に改修した上野橋下流の護岸は、このさがげとなるものです。

川には、岸を削り、土を運び、堆積させ、そこに住む生き物たちの環境を生み出す力があります。多自然型川づくりは、その機能を活用し、川そのものに「自然に満ちた川づくり」をしてもらい取り組みます。昔ながらの「遊べる川」をよみがえらせるためには、人間のことだけでなく、動植物の生態系を守るという観点からの川づくりが重要になっています。



↑災害復旧工事により、多自然型川づくりが行われた上野橋下流の護岸。

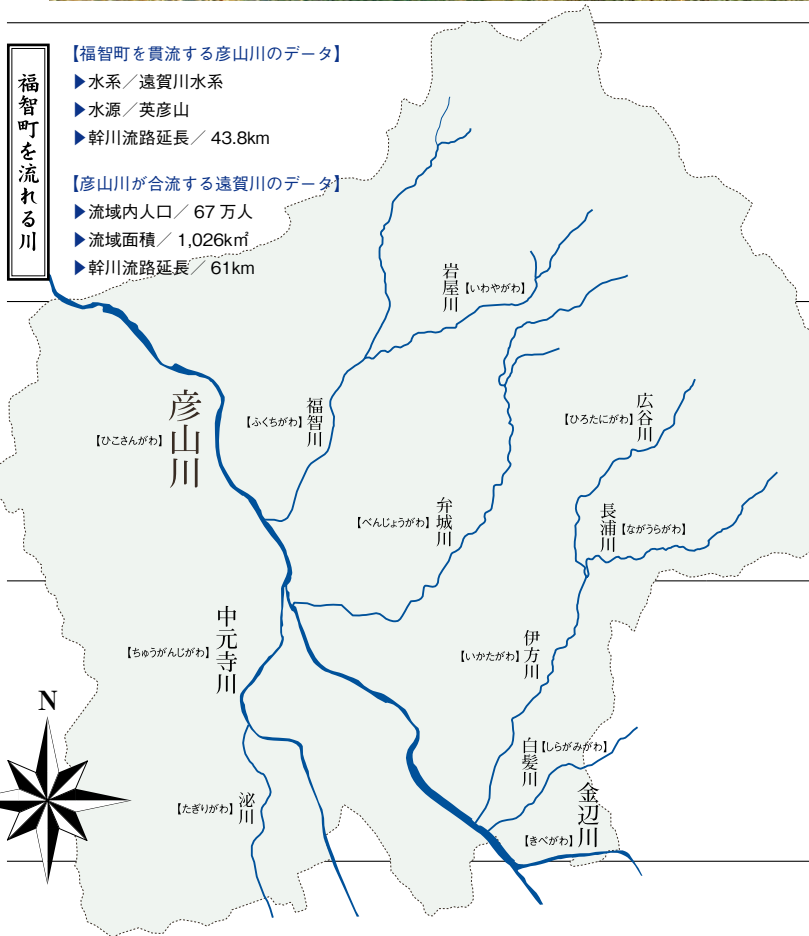
→農繁期を迎え、農業用水の確保のため圃場堰(画方向)を上げ、満水状態になった彦山川。上野橋下流(堰を下ろせば、また護岸の詰りが現れる。川沿いには遊歩道も整備されている。



国土交通省 遠賀川河川事務所 松木 洋忠 所長

ここは、遠賀川流域で近年唯一「アユ」の産卵が確認されている場所なんです。この上野橋下流の護岸は、9年前に国が災害復旧工事をしました。「多自然型川づくり」を目指したモデルの事業で、生き物が生育しやすい環境を整え、川による復元・再生が期待できる先進的な設計になっています。こんな川づくりを見にぜひ、みなさんに川へ来ていただきたいですね。

川に近づけばゴミなどの環境問題も見えてきます。それに、いざ洪水の時の意識も行動も具体的になると思います。そして、川を日常における生活空間の一部にするために、ぜひ、みなさんの声をお聞かせください。



川

Hikosangawa

を知る

血管のように支流が走り、平地の中央を堂々と流れる彦山川。町を貫流して遠賀川に合流し、海へと北流します。

遠賀川水系の一大支流

霊峰英彦山を源とし、中元寺川、金辺川の両川を含みながら、ここ福智町で一気に川幅を増す彦山川。福智山からの流れを合わせ、豊かに水をたたえています。総延長は43.8km、遠賀川水系では最大の支流となっています。彦山川は、福智町からおよそ6km下流の直方市で遠賀川に合流し、平野を北へ北へと流れて、響灘にそそぎます。

その本流となる遠賀川は、九州では筑後川に次ぐ流域内人口を誇り、67万人の生活を支えています。人口密度では1平方kmあたり6500人で九州一、総延長は61km、流域面積1千26平方kmの一級河川です。

かつては炭都の大動脈

山を下り平野を抜け、絶えず姿を変えながら北流する彦山川。長い歴史の中で、川が持つダイナミズムが変化に富んだ地形を生み出してきました。瀬や淵、砂州といった河川特有の地形には多種多様な生き物が生息し、その壮大な流れが人々の豊

かな文化を今日までくぐりてきたのです。

遠賀川と彦山川は、縄文時代から稲作で栄えました。江戸時代には米や石炭を船(川ひらた)で港へと運ぶ大動脈として活躍「筑豊」と呼ばれ始めたのは、明治になって筑前と豊前の二国に鉄道が敷かれる時からです。しかし、炭鉱全盛期の当時は、石炭を洗っていたために川全体が黒く染まり「ぜんざい川」とも呼ばれていました。それまで上っていた鮭の姿もやがて見られなくなりました。

受難の川を救うために

炭鉱が閉山して数十年、元の川の色に戻っているとはいえ、水質は依然としてよくありません。石炭に代わり、今では家庭からの排水で汚染されています。浄化槽の普及率が低いことも原因の一つです。残念ながら平成12年の九州一級河川水質ランキングでは遠賀川がワースト1位、彦山川がワースト3位を記録。近年は多自然型の川づくりや子どもたちの環境教育も進み、水質も含めた河川の深刻な環境問題に対し、さまざまな取り組みが行われています。